

山と博物館

第22巻 第2号 1977年 2月25日 大町山岳博物館



木崎湖のワカサギの穴釣

撮影 千葉 彬司

大雪とスキー場

文明がいくら進んでも人間の力が及ばないところ、自然の摂理の厳しさがあざむきがある。暖冬の年いくらスキー用品が売れない、オーバーコートが売れないと、暖かい空を仰いで見てもどうしようもないように、今年のような厳しい冬に雪が多すぎて困る、列車のダイヤが規制され、車が思うように動かないと困ると、いろんなところに当り散らしたところ、これも又どうしようもない事であり空から降ってきた雪を天に返すわけにもいかない。自然の力は人間がいくらいいわい騒ぎたてて変えようとしてもどうする事もできない。私の住む白馬山麓のスキー場も例年以上に雪が多い。私共は商売上この雪を大歓迎したわけであるけれど、こゝに少し問題がある。この雪は白馬山麓に降っただけでなく日本全国、スキー場はもとより平地の村や町に迄降った。そして何十年ぶりという大寒波も運んでくれた。こゝ、白馬山麓は、スキー場として良質な雪と立地条件に恵まれ、若者達の人気を一身に集めたスキー場である。今迄恵まれたスキー場に任んで余り雪不足の苦しみを味わったことはなかったけれど今年には雪多きが故の苦しみを味わっている今日この頃である。「一体この雪はいつ迄続くのかねえ」と、天を仰いで乱舞しながら降ってくる雪を見てみると、様々な型をした結晶が喜々として舞い降りてくる。この美しい雪達を何で歓迎しないで居られようか……と現実の厳しさをいささか忘れ、雪と戯れてしまいたい。いくら人間の生活に支障があろうと、この限りなく美しい雪を天からの使者として迎え、文化的生活に慣れてしまった私共をひと時太古の昔にもどして見たい。こんな時こそ、都会的になってしまったと嘆いている私共母親は、子供達に自然の摂理の厳しさを教える体験させてみてはどうだろうか。それにつけてもこの深い雪の中、山に住むカモシカ達はどのように生きていくのだろうかなどと考えてみる。

(小谷村 白馬ベルグハウス 松沢寿子)

大町と私

爪生 卓造

三年前の冬のことである。某社の依頼で、「雪の信濃路」という紀行を書くことになった。私は躊躇なく大糸沿線の雪景をえらび、旅の起点を大町に置いた。

大町と考えたのは、一つは前々から山岳博物館を見学したいと思っていたからでもある。このとき私は、同館の平林館長にお目にかかり、館内を見学し、先々の旅の御配慮までいただくなど、思いがけない厚遇に会った。

年の瀬も近いころで、大町は厚い雪に降りこめられていた。私は平林さんから、大町の古いガイドの平林高吉さんを紹介され、雪の降りしきるなかに翁を訪ねた。

翌日も雪。私は仁科三湖の雪景をつぎつぎと見て歩いた。北にすすむほど積雪は厚く、雪降りは激しくなった。菜場までくると、もう咫尺も弁せぬ降りであった。私は駅前の坂を下って、中綱湖のほとりに立った。柳の梢がかすかに揺らぎ、梢の間から白い湖が見下ろされた。乳白色のペールの底に、ほのかな白銀の姿をのぞかせている。岸辺の水がわずかに氷を割って、降雪の下であえかな裏葉色に沈む。湖中の杭は点々と綿帽子を冠り、朽ちた舟が、雪の重みで、氷のなかに沈みそうに見える。雪は降る。気温はそんなに低くないらしい。重く大きな雪片が霏々と舞いしき

る。雪華はスキ間もなく視界をうめ、白一色のなかに、柳の梢だけが白茶けた色に揺らぎ続けた。

私は八方に足をのぼすつもりだったが、大糸線は不通になった。車も保証出来ない、と。やむなく菜場から引返した。

私は予定通りに「雪の信濃路」を書き、もう一つ別な雑誌に「信濃大町」という随筆を書いた。こんなことが縁で、今度は、「山と溪谷社」から大町を舞台にした小説を連載しないか、といわれた。私は戸迷った。二つ続けて大町の記事を綴ったので、私は大町通と感ちがいされたのかもしれない。しかし、私は実のところ、大町にはストレンジジャーとおなじであった。戦前針ノ木にいったとき一泊したぐらいで、あとはほとんど素通りしてしまっている。それに大町といえば、当然山のことを語るなければならない。私はまた針ノ木や後立山方面には、きわめてくらくらといいつけて書けといわれてみると、なんとなく大町に惹かれる。

取材していけばなんとかなるだろう、という妙な自信も湧いてくる。これが私たちの稼業でもある。私は前回の厚遇から博物館に頼ろう、と考えた。

話が決まると、私は早速大町にいき、博物館に直行した。案の定、館長以下学芸員の方々の厚遇を得ることができた。私は一年間に十回ほど大町に通い、取材に当たった。

大町の駅につくと、駅前のビジネス・ホテルにチエック・インし、ただちに博物館に車を走らせた。そうして一年間の連載を終え、昨年の春に単行本として出版されたのが、「おまら物語」である。自作のことはわからないが、私としては、ある程度納得のいく作に仕上がったような気がしている。この物語が、良くも悪しくも、完結できたのは、一から十まで博物館の方々のお力添えによるものと思っている。

一泊、長くて二泊だが、一年間に十回も通

うと、ストレンジジャーにも、おのずから愛着が湧いてくる。どこといった特色もないが、大町の町並が、一回、また一回となつかしいものになっていった。

大町温泉郷やホテルクロヨン、また扇沢などに泊ることをすすめられたが、私は決まって駅前のビジネス・ホテルに宿をとった。大町の町なかに泊った方が、大町の雰囲気を知るのがに好都合に思われたからである。

博物館のお引きまわしによつて、桜井一雄平林高吉、勝山佐久衛さんという三人の長老ガイドにもお目にかかり、対山館と百瀬慎太郎、案内した山の紳士たち品右衛門や喜作のこと、岩魚釣りやカモシカ猟について、その他さまざまな下界では滅多に聞けない知識を得ることができた。平林館長の幹施で大出の里へ再三出かけ、姥堂の本尊を拝み、品右衛門の生家を訪ねた。翁直系の姥からかすかすの翁の逸話を聞いた。厚い雪を掘りおこし、山名主の墓にも詣でることができた。

九日町に藤沢誠先生をお訪ねした。朱子学の泰斗、信大名誉教授である。格調高いお話ぶりで、長井雲坪という画家の姿を浮彫りにして下さった。荻生徂徠、築井四郎、志賀重昂、また菅江真澄など、さまざまな人物について語られる。晩年の慎太郎さんとも親しく交際され、先生なりの慎太郎感もうかがった。これは非常に好意に満ちたものであった。先生は終始端座のまま、ものやわらかく語られた。私は講義を聞く学生の態度でノートをとりを辞した。

邸を辞すと、外は寒月が冴え、薄い雪が、がりがりに凍りついていった。

またあるときは、学芸員補の荒井さんの案内で、鹿島部落に狩野キクノさんを訪ねた。まだまだお元気で、人なつっこい笑顔で、迎えてくれた。私は昼食をよばれながら鹿島の山と里の今昔談に耳をかたむけたのだが、先日新聞で、その訃に接した。一ト月ばかりたつて、桜井さんから、キクノさんを悼む便り



大町の湖の冬 撮影 山本機挙

が届いた。

鹿島の掃途、源波の荒井家にお邪魔した。とても大きく大きな家で、荒井さんの母堂から茶菓のもてなしを受けた。春雨に山里が和やかに煙る日であった。

館長は信大で植物学を専攻された。私は附近の山々を歩いては、落葉や草木の実を持ちかえり、館長から名前を聞いたが、これも大きな楽しみの一つであった。

ある日、多分五月の中旬ごろだったろうが館の庭に、見事なコマクサが花開いているのを見た。コマクサは、二五〇以上に登らなければ見ることができない。いうまでもなく高山植物の女王である。里で見るとは、淡紅色の花びらは高山のものよりいっそうあでやかであった。さすがに植物の専門家だ、と思った。コマクサは花が終ると、すぐに越冬芽が出来てしまう。低地は高山とちがって夏が高温のため、越冬芽が徒長する。ここらを抑制するところに、開花のコツがあるというのであった。

千葉さんは動物の専門家、この博物館のカモシカの飼育は、氏の苦心のたまものである。親にはぐれた子、傷ついた親、そういうのを連れてきて飼育する。カモシカの気むづかしい習性、山にいるときの謎の食糧等々その飼育がいかに難事であるかを知ることができた。

夜は酒／＼呑んべえだから仕方がない。金蘭黒部や大雪溪など、その味ともう長い馴染のような気持になって盃を空けた。粉雪の降る夜の酒は、とくにハラワタにしみる。といつて若葉にもよし、花にもよし、夏の暑さにもまたよし秋たければ白玉の歯にしみとおる。酒に悪い季節は皆無である。館の方々も、おしなべて、酒と仲の悪いほうではないのが嬉しかった。

高瀬川の赤魚、ワラビ、コゴミ、筍、氷の穴から釣上げられたワカサギ、名物の手打そ

ば、穂高のワサビ等々、四季の肴にもこと欠かない。

大町はしだいに私の心のなかにとけこんでいった。ことのほか博物館に心惹かれた。前庭からの山々の贅沢な眺めもさることながらあの古めかしい館の建物がなつかしくてならない。薄クリームのペンキの外装、景色の垂がむガラス窓、ギキイと鳴る階段や廊下、旧大町中学の校舎というが、昔の中学は、どこもこもおなじような建築であった。私も札幌の中学生のころ、こんな校舎で学んだ。悪童だった私は、冬の日に寒々しい廊下に立たされたり、喧嘩相手と追いつ追われつ、階段を走り上り、走り下つた。あるときは仇名を叫んでも仇名を連呼し続けた。身体きわまって、二階の窓から下の雪を目がけてダイビングしたり、つかまってビンタを食らったり一品右衛門の写真や、喜作の遺品などを眺めながら、とんだトンチンカンな思い出に、しらずしらず口もとがほころんでいく。教師や友人の顔がつきつきと浮かんでくる。近年、こういう建物はとみに少なくなつた。私が訪れるところでは、ここぐらいなものである。

しかし、館にはたくさんさんの貴重な品々が陳列されている。名称は山岳博物館だが、内容は総合的な郷土館である。郷土室、地学室、生物室等々、もう二度と得られまい発掘品や時代を経た民具の数々など一いつかはやはり近代的な防火建築にかえなければならぬであろう。古代からもし火事がなかったなら、日本の文化遺産は、現在の何十倍にもなっていたにちがいない。一番おそろしいのは火災である。情緒と実益とは、いつも平行線を辿るものなのであろう。私が戦前にはじめて大町に一夜をすごしたころは、対山館はまだ営業していた。昭和十五、六年のころだった、と思う。



ワカンジキをつける平林高吉(左)と桜井一雄の両氏(昭和10年頃)

私は音に聞く対山館に泊るつもりで大町にきたが、玄関の前でなんとなく踵を返してしまつた。山の男たちの間で、館の名があまりに高かつたため、生来の天邪鬼根性が頭をもちあげたのである。今にしてみれば、惜しいことをした、と思う。なくなるのがわかつていけば泊まっておくべきであった。慎太郎さんにも会えたかもしれない。などと考へてゐる。

現在は外科医院になつてゐる。外装はモルタルにかわつたが、内容はまだ色濃く昔の面影をとどめてゐる、という。私は館を通じて見学を申出たが、二歩もなく断られた。患者を粧つていけばいいだろうか、などと館の方々と笑い合つたが、先方が断るものを無理に見る要もない、と思つた。

作家という職業は、ときとしてひどく嫌われる。誤解も受ける。こちらが好意を持つて

当つても、先方はウサンくさい顔をする。ただ他人のアラを探し、いらざる詮索をする人種だ、ぐらいに思われる。考へてみればいたしかたがない。筆が滑れば、なにを書くかわからないのである。

しかし、大町では、旧対山館を除いて、行く先々で、きわめて好意的な協力を得ることができた。これもひとえに博物館のおかげ、と感謝してゐる。

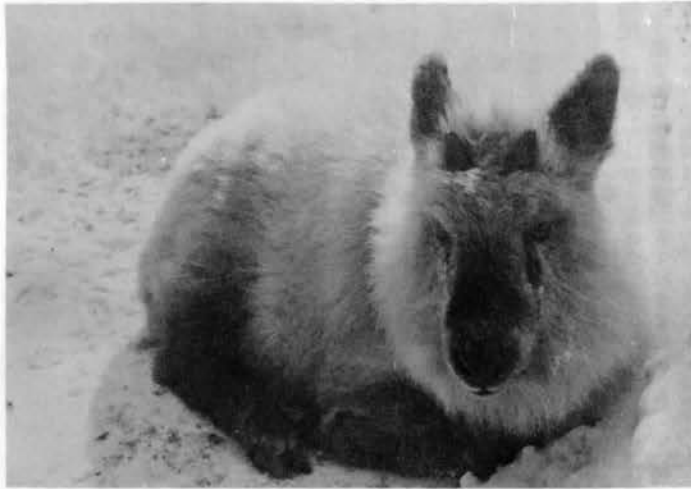
昨年の三月、私の「おおまち物語」が、出版されたので、大町のさる料亭で、ささやかな内祝の宴を持った。私は取材でお世話になつた方々を集つていただいた。

藤沢先生も寒いなかに心よく御出席下さつた。平林館長、千葉、荒井、横沢の諸氏。品右衛門家からは曾孫に当る遠山茂氏、種山商工観光課長、桜井一雄、勝山佐久衛さん、平林高吉さんが御不快のため欠席された以外は全員が顔を揃えて下さつた。招待者側は雑誌「山と深谷」の節田編集長と原邦三氏、それに私の総勢十一名であつた。

諸氏からお祝の言葉と、拙作について、それぞれ感想をいただいた。私には参考になることが多かつた。自作について語られることは、作家にとつて、なによりものはなむけである。やがて酒がまわり、歌も飛び出す賑やかな会に発展して、私には思い出の深い一夜となつた。

ただ残念に思つたのは、御一同の引足の早かつたことである。私たちはぼんやりと取残される形となつた。宴のあとは、それでなくとも心淋しい。その気持を引立てるように、私たちは灯を求めて、夜の更けるまで呑み続けた。

翌日、私はただ一人、木曾路に赴き、奈良井から鳥井峠を越して藪原に出た。大町から思うと、木曾はやはり南である。雪も薄く、陽も明るい。岩を噛む流れには、早春の香が一杯にこぼれていた。(作家)



満21年目を迎えた岳子

一、岳子の骨折
1月5日の朝、当館のカモシカ達が最も好む餌、ビートパルプ+リンゴボイルを持って岳子の放養園に入った。

いつもならいそぐと寄ってくる岳子が、今日に限ってどうしたのか、園内の一角に座ったまま顔をふりむけただけである。

そのうち食べにくるだろうと……しかし、午前10時頃の岳子の姿は変なのである。

三本足で右前肢を引きずるようにしている。近よって足にさわると「エエーン」とないて座りこんでしまった。

どうも変である。以前に柵のアンクルに足をぶつけて何回か薬をすりこんでやったこともあるが、今回はちよつと様子が違う。

早々に獣医の往診を求めた結果は、右前肢

上腕骨骨折、それも関節に近いところ。どうして? 当時は原因がわからなかったが、後で右前肢のヒズメに横に1センチくらいの傷をみつけた。

多分何かのほずみで金網にヒズメをひつかけてしまい、とうとうもがいたのが原因としか考えられない。

この状態ではどうしようもないとの獣医の意見で、壊疽の予防・鎮痛剤の治療を施し、自然治癒を待つこととなった。

それから20数日、岳子は飼育開始以来満21年目の2月2日を迎えた。

当初2・3日は食欲がなく私達は心配させたが、今では好物のマサキ・コナラ乾

葉・野菜類の特別食を食べ、夜間は赤外線ランプで保温された保温舎に収容される毎日である。

必要以外は歩きまわることもなく終日見通しの利く地点に座って休息やらはんすうをしており、健康状態は良いようである。

岳子が天寿をまっとうできるよう日々私達は願っている。

二、そのほかのカモシカ達
2月20日現在、当館で飼育されているカモシカは、最古参の「岳子」を含めて10頭である。

昨年までの7頭に新しく仲間入りのしたのは、あつ子の子(51・6・7

生れ)、沢子の子(51・7・7生れ)、今年1月20日、猟犬に噛まれて日養村から運ばれた幼獣の3頭である。

沢子と大町19号は、このところ夏が近づく

と、当館の約2倍の標高にある扇沢カモシカ園(一四五〇)に移される。

昨年は6月18日に移され、7月7日に出産した、沢子に似た色の黒い子であった。

22年目を迎えたカモシカ「岳子」とその周辺

三、飼料の改良
カモシカの飼料改良は各飼育施設で行われており、当館も昨年からは既に与えていたビートパルプにリンゴボイルの添加を試みている。

ビート単一味だけでは嗜好の低かったものが、添加することにより嗜好は最高となり、一年間の試用では健康状態はよくリンゴより安価、保存が利くことが喜ばしい。

リンゴは、端境期には単価が高く、保存が長期間きかない。そこで、何かリンゴに代るものと考えた結果である。

ただし、リンゴと違って、リンゴジュースを採取した後、ボイルして缶詰に詰めたためにビタミン類は期待できないので、他の飼料で

おぎなうてやらねばならないことなどもあり現在も混合率・栄養価など更に工夫を進めて

いる段階である。

お知らせ
休館日・観覧料・開館時間の変更
52年4月1日より、月曜日が休館となります。ただし付風園の動物はみられます。

観覧料は個人—大人・150円、小人、50円
団体—大人・120円、小人・40円(大人は高校生以上・団体は20名以上)となります。

開館は午前9時より午後4時30分迄です。



沢子とその子ども

山と博物館 第22巻 第2号
発行所 長野県大町市TEL(026)22-1111
印刷所 大町市下仲町 山と博物館
大町市下仲町 大栄タイムス印刷部
定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野)三三二九三三